

お猿のはなし



玉子を持つて逃げたお猿

太郎さんが金魚に御飯粒をやらうと思つて、台所の方へ駆けて行きました。台所の戸をがらりと開けると、大きなお猿が、顔中御飯粒だらけにして、太郎さんをにらめました。太郎さんはびつくり仰天、

「きやつ。」

と言つて青くなつてしまひました。其處へお母さんが、

「どうしたの。」

と言つて出ていらつしやいましたが、お猿が飛び

かゝつて來さうにしたのを見ると、びつくりして台所の戸をびしやんと締めておしまひになりました。

水谷年惠

其處へおぢい様がいらつしやつて、

「猿か。猿は長い物で追ふといふのだよ。」

とおつしやつて、物干竿を持つていらつしやいました。そつと戸を開けて見ると、お猿は口をもぐ／＼させながら、こちらを向いて、又怒りました。

おぢい様が竿を突出して、しいつ、しいつとおつしやると、お猿は急いで兩手に玉子をつづつ持つて、のそのそと勝手口の方へ出て行つて、塀の上へ飛乗りました。台所には御飯粒が一ぱい

こぼれて居り、玉子の殻が六つも七つも捨てゝあつて、白みだけが、たらり、たらりと壘の上に流れて居ります。蓋を取離したおはちの中の御飯は、掴み出されてしまつて少しばかりしか残つて居りませんでした。

塀の上へ乗つたお猿は、玉子の一つを食べようと思つて、ごつんと塀に打附けました。玉子はがしやと破れて、黄みも白みもたらりと、流れて落ちてしまひました。

「やあ、猿だ、猿だ。」

と言つて、近處の人々が大勢寄つて來ました。お猿はも一つの玉子をしつかり握つたまゝ、塀の傍の柿の木へ飛移りました。皆ががや／＼言つて騒いだり、笑つたり、竿でつゝいたりするので、お猿は柿の木から飛下りました。

「そら、下りたぞ。」

太郎さんも、おぢい様も、近處の人々も一緒にな

つて、追駈けました。お猿は玉子を持つたまゝ、どん／＼逃げて、お宮の森の中へ駈込んでしまひました。そして大木に登つてしまつたので、姿も見る事が出来ませんでした。

鏡に顔を映したお猿

花子さんが大きな鏡の前で髪をかいで居ました。あかるい鏡の中には、可愛らしい花子さんの顔が唯一つ映つて居ました。

突然お猿の赤い顔が鏡の中へ現はれました。其のお猿は花子さんの眞似をして、頭へ手をやつて髪をかく振をして、鏡の中を覗きこみました。花子さんはびつくりして、

「きやあゝつ。」

と大きな聲を出しました。お姉様が其の聲を聞きつけて、

「なあに。」

と言つて見にいraftしやいました。するとお猿はいち早く逃げて、お隣の屋根へ飛上りました。

「あら、あら。」

と言つて居る中に、其の又お隣の屋根へ飛んで行きました。人々が、

「猿が居る、猿が居る。」

と騒ぐと、お猿はびよん／＼と屋根から屋根へ飛移り飛移りして、しまひには何處かへ行つてしまひました。

お辨當を盗んだお猿

猿廻しが今日も、昨日も、一昨日も御飯を食べませんでした。猿廻しのおなかは、ぺこ／＼になつてしまひました。何か買つて食べたいと思つても、猿廻しの墓口の中には一錢のおあしもありませんでした。猿廻しは、大川の橋の上まで來るとあまりおなかがすいて、ぺちやんと坐込んでしま

ひました。猿廻しの脊中には、赤いちやんちやんこを着たお猿が、ちよこんと乗つかつて居ました。主人が坐込んでしまふと、下へありて、可哀想な主人の脊中を撫でてあげて、悲しがつて居ました。

すると、ボチが橋の上を通りかゝりました。仲

悪の猿が居ると見ると、

「わん、わん。」

と吠えて、お猿の所へ寄つて來ました。お猿は主人を大切に思つて、

「きつ、きつ。」

と言つて、ボチを追ひましたが、ボチはちつとも退きません。

「わん、わん／＼。」

と益々吠えます。その中に黒犬がやつて來ました。そしてボチと一緒になつて、

「わん／＼、わん／＼。」

と吠立てて、お猿にかゝつて來ます。お猿は主人が大切ですから、一生懸命で我慢して、犬に負けないやうに、

「きつ／＼、きつ／＼。」

と鳴いて、犬を追拂はうとしましたが、かなひません。

其處へ又白犬や赤犬が、仲間の加勢にやつて來ました。ぶちも來ました。むくも來ました。さあ大變、六匹の犬が一時に、

「わん／＼／＼、わん／＼／＼。」

と吠立てて、かかつて來るのですからお猿はたまりません。お猿は赤いちやんちやんこを着たまゝで、どん／＼逃出しました。ポチに、黒に、白に、赤に、ぶちに、むくの六匹の犬が、お猿のあとを追つて駆出しました。

お猿は一生懸命で、どん／＼走りましたが、六匹の犬に追ひつかれさうになつたので、道端の交

番の中へ逃込みました。續いて六匹の犬が駆込まうとしました。お巡りさんはびつくりしました。これは赤いちやんちやんこのお猿が可哀想だと思つて、六匹の犬を追拂つて呉れました。

六匹の犬があつちの方へ逃げて行つてしまふと今度はお猿が交番から逃出しました。お猿はお巡りさんのお辨當をさらつて駆けて行きます。お巡りさんは、もうすぐお晝だから食べようと思つてゐたお辨當をお猿に盗まれたのですから

「これは大變だ、辨當泥棒！」

と言つて、お猿を追駆けました。お猿はどん／＼走りしました。お巡りさんはどん／＼追駆けました。お猿はやつと大川の橋の上にへたばつてゐる主人の所へ走り着きました。追駆けて來たお巡りさんは、先づ猿廻しに、

「どうしたのだ。」

と尋ねました。猿廻しは、

「今日も、昨日も、一昨日も何も食べません。」
と言ひました。

「あゝさうか。それは可哀想だ。ぢやあ私の辨當
をあげよう。お猿もあがり。」と言つて、お猿の
持つて居る辨當を開いてやりました。猿廻しは
「有難う御座います。有難う御座います。」

と、何遍もお巡りさんにお禮を言つて、赤いちや
んちゃんこのお猿と二人で分けて食べました。ど
んなにいいしかつたでせう。

舊掘夕日の岡を歸りけり

紅葉

空壕に響きて椎の降りけり

かな女

*

*

*

*

*

*